

辺野古の基地建設は、1996年のSACO（沖縄に関する特別行動委員会）最終報告の中で、沖縄県宜野湾市にある普天間基地を返還する代わりに代替基地として建設計画が持ち上がりました。現在は、事実上の基地建設着工であるボーリング調査が進められようとしており、座り込みの闘いにより阻止し続けています。



スパット

1月13日、那覇防衛施設局は水深4m以上の海底を掘削する「スパット台船」を辺野古沖に搬送しましたが、各漁協の海人（漁民）と住民らの必死の阻止行動により、台船を海上に降ろすことができず、中城湾に引き返しました。



海人

辺野古の海を守るための海上行動に駆けつけてくださっている国頭、東、金武、宜野座、石川の海人たち。



差し止め訴訟

12月27日、ボーリング調査に反対する市民や近隣海域の海人ら68人が原告となり、国を相手にボーリング調査の差し止めを求める訴えを那覇地裁に起こしました。

今しかない! 全国から辺野古・基地建設反対の声を!

辺野古の港に座り込み、海上での攻防戦を伴った基地建設阻止行動は277日目を超え、今まさに海底に穴をあけるといふ「掘削作業」が日本政府・防衛施設局によって開始されようとしています。

那覇防衛施設局は、11月16日から、掘削に必要な単管足場（水深4m未満）、スパット台船（同4m以上25m未満）、固定ブイやぐら（同25m以上）を載せた台船を辺野古沖の大浦湾に回航させ、リーフ内外において掘削のための足場の設置作業を急ピッチで進めています。これに対して座り込み参加者らは、まさに体を張った決死の覚悟で阻止行動を展開しています。16日には、阻止船2隻が台船の進行を阻止しようとギリギリまで近づくも、台船は速度を変えずに航行を続け、たまりかねたメンバー2人が海に飛び込みました。台船の操縦士に対して赤色のライフジャケットを懸命に

ふる二人は、ギリギリのところでは衝突を避けたが、台船は二人が手にしていたジャケットを巻き込みながら数十メートル前進しました。翌日からはカヌー隊も出て、施設局側の罵声や暴力行為にも負けず単管にしがみついたり、設置中の単管足場を取り囲んだりしながら必死の阻止行動を続けています。しかし、施設局は20日までに5箇所単管足場の設置作業に着手し、スパット台船の設置も完了したと発表しており、今まさに辺野古の闘いは最大の正念場を迎えているのです。

今、辺野古にはより多くの方が駆けつけることが必要です。そして何よりも、辺野古だけではなく、日本全国から基地建設反対の声をあげなければこの暴挙は絶対に止まりません。今こそ最大限の声をあげ、行動するときです!一緒に立ち上がってください!(松本)

●那覇

沖縄島

辺野古

単管足場

施設局は水深4m未満の海底を掘削する「単管足場」を4箇所を組み立てていますが、海人と住民が一体となった海上行動によって、それ以上の作業は完全にストップしています。海底にはまだ1本の杭も打たせていません。



サイレント

毎週土曜日の夕方には「サイレントキャンドル」と銘打って、キャンプ・シュワブの米兵たちに「辺野古の海とジュゴンを守ろう」と静かに訴える行動が行われています。



作業船

施設局がチャーターしている漁船。操船する漁民、施設局員、作業員が乗っています。